

周知のように、ヒュームはわれわれの知覚を印象(impression)と観念(idea)とに区分し、印象にわれわれの認識の起源を求める。そしてヒュームは、われわれがそうした印象を直示的に獲得すると考えている。ヒュームの主著の『人間本性論』の冒頭に現れる「子どもに緋色(…)の観念を与えるために、私は対象を提示する。いいかえれば、これら(緋色などの)印象を彼に伝える」(T.1.1.1.8)というフレーズは、まさにこのことを示しているだろう。

一方、ヒュームは、その印象が、われわれの心による操作を受けず、ありのままの状態を受けとられるとも考えている。「心の作用や感覚(それゆえ印象)は意識によってわれわれに知られるため、それらは必然的に、あらゆる点で、ありのままであり、またありのままに現れるはずである」(T.1.4.2.7)。この主張をふまえると、たとえば緋色の色の「観念化」の過程は、次のようになるだろう。「ありのままの緋色がある外的対象のうち知覚されていて、そこに単一の名前「緋色/scarlet」が与えられることで、われわれはその色の単一の観念を獲得する」。しかし、この単一の事例だけでは緋色の観念が形成されるのに不十分であろう。緋色の対象を見て、その対象の別の特徴を「緋色」と捉えることは十分にありうるからである。そこでヒュームは、いくつかの緋色の事例を観察し、それらのうちにある「類似」が看取されることで、われわれはある色の知覚の抽象を行なうことができるという(T.1.1.7)。「緋色の観念をもつ」ということで、実際に「緋色」という性質を指すことができるためには、この抽象の過程が必須である。そしてまた、このヒュームの抽象論については、すでに相当量の研究がなされてきている。

ただ、本発表では、このストーリーの別の点に疑問を投げかけたい。それは次の問いである。「なぜヒュームの議論のなかに現れる子ども(そして彼に言葉を教える人間)は、印象として現前する緋色を「一つの色」として見ることができるのだろうか」。ある色の観念(たとえば「緋色の」観念)については、上述の過程をへて、ある一つの色認識が得られる。しかしながら、それはあくまで観念と抽象を経由した話であって、現前する印象がそれによって一つの色として捉えられるわけではない。また、この問いについて、ごく普通に答えようとするならば、「ある対象と知覚者(子ども、言葉を教える人)をとりまく条件(光、対象、感官…)が変わっていないから」ということができよう。しかし、このように答えることは、ヒュームにとって得策であるとは思えない。というのも、この答え方では、別の要素に還元されることのないという印象の背後に、それを成立させる体系を前提とすることで、ヒューム哲学のスタートラインを描きなおさなければならないからである。

さて、この問いについては、もう一つのより単純な答え方、つまり「実際に同じように見えるから」という答え方がある。そして実際、印象の同一性についての問いに答えるなら、こちらの路線をとるほうがヒュームの体系を崩すことがないように思われる。しかしながら、この説明方法が含意するのは、ある色の印象の単一の知覚をヒュームが論じるさい、「ように見えるから」ということをつうじて、すでに一種の構成的契機が前提とされているということである。それゆえ、もしこの路線をとるならば、ヒューム哲学の構成的契機と、ヒュームが考えているようにみえる知覚の所与性とあいだで、折り合いをつけなければならない。

そこで発表者は、以下に示す方針から、ヒューム哲学における印象の構成の契機を論じつつ、印象の所与性や同一性の問題について考えていきたい。

印象が「ありのままにある」ということを真面目にとるなら、われわれの心が印象の知覚について何らかのはたらきかけを行なうようなことはないはずである。しかし、ヒュームのテキストのいくつかの箇所にもみられるその「ありのまま」は、各々の瞬間における(緋色のような)印象の知覚を統一することまで含意しているようにはみえない。実際、『人間本性論』のなかで、ヒュームは各々の瞬間の知覚から外的対象という考えに至る過程を描いているが(T.1.4.2)、そこでは、各々の瞬間における知覚の類似の把握が重要な役割を果たしている。そしてこの議論を目下の問題に適用すると、次のようにいうことができる。すなわち、各々の瞬間における色の印象の知覚を「類似する」という認識の契機を挟むことで、一つの色印象が構成される。さらに、抽象の説明にも用いられている類似の性質に着目するなら(T.1.1.7.7)、各々の瞬間の印象が厳密には異なっても、われわれが「類似する」と考えるかぎりにおいて、一つの「緋色の」印象が保たれる——すなわち、われわれは実際には、印象のヒュームの言葉とは異なり、少なくとも知覚的性質にかんして「ありのままに」知覚を把握しているのではないということができる。このような意味で印象の同一性は保たれるのであり、さらなる背後から根拠を持ちだす必要もなければ、手つかずの状態で知覚される印象のような考えから出発する必要もないと結論づけられる。